



2023年03月 第21巻 第3号

かく語りき—聖人の言葉

仕事によってのみ、仕事の束縛を取り除くことができます。完全に取り除けるのは、後になってからです。たとえちょっとした間でも、仕事をしないでいてはいけません。仕事はくだらない考えを払いのけるに役立ちます。

…ホーリー・マザー・シュリー・サーラダー・デーヴィー

誰もダメだと決めつけない：助けの手を差し伸べられるなら、そうしなさい。それができないのなら、手を合わせて、兄弟たちを祝福し、彼らに独自の道を歩ませよ。

…スワミー・ヴィヴェーカーナンダ

今月の目次

- ・かく語りき—聖人の言葉
- ・お知らせ
- ・2023年2月19日 返子サットサンガ 午前
「スワミー・ブラフマーナンダ —

その生涯と教え」

スワミー・ディッヴィヤーナターナンダ

・2023年2月19日 返子サットサンガ 午後

「スワミー・ブラフマーナンダ」

スワミー・メーダサーナンダ

・忘れられない物語

・今月の思想

お知らせ

各プログラムに参加を希望される方はご一報ください。引き続き、マスク着用、ソーシャルディスタンス等のご協力をお願いいたします。

・日本ヴェーダータ協会の行事予定はホームページをご確認ください。

<https://www.vedanta.jp.com/>

2023年2月19日 返子サットサンガ 午前

「スワミー・ブラフマーナンダ — その生涯と教え」

スワミー・ディッヴィヤーナターナンダ

シュリー・ラーマクリシュナの弟子で、偉大な預言者であるスワミー・ヴィヴェーカーナンダは、世界中にシュリー・ラーマクリシュナの生きる力を与えるメッセージを発信するための重要な役割を果たしました。彼はアドヴァイタ・ヴェーダーンタを人類に広めるためにやってきたのです。のちにポータランドのヴェーダーンタ協会代表となったホーリー・マザーの弟子スワミー・アセーシャーナンダは、「スワミー・ヴィヴェーカーナンダは、主キリストが『あなたはペトロ。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てる』（マタイによる福音書 16. 18）と言われた、聖ペテロに匹敵する」と述べました。一方、スワミー・ブラフマーナンダは愛の宗教：バクティを私たちの世界に広めるためにやってきました。

シュリー・ラーマクリシュナは母なる神に「お母さん、どうか私に、神を心から愛する子供をください。私は昼も夜も世俗的な人々と話すのにうんざりしています」と祈りました。その後のある日、シュリー・ラーマクリシュナは、母なる神が小さな赤ちゃんを自分の膝の上に置くというヴィジョンを見ました。ずいぶん経って、初めてラカル(スワミー・ブラフマーナンダの僧侶になる前の名前)を見たとき、シュリー・ラーマクリシュナはその少年がヴィジョンで見た子供と同一人物だとすぐに分かりました。ラカルはシュリ

ー・ラーマクリシュナに対して、本当の子供のように振る舞いました。突然、どこからか走ってきて、シュリー・ラーマクリシュナの膝の上に飛び乗ったりもしました。シュリー・ラーマクリシュナもラカルを自分の子供のように見ていました。何かでラカルが少し体調を崩すと、師はとても心配して、信者に「どうしたらいいだろう」と訴えました。



シュリー・ラーマクリシュナは、すべての人の内側を見通しました。そして「ラカルは王国を運営できるのだよ」と言ったこともあります。これを聞いていたスワミージーは兄弟たちに「ラカルをラージャと呼ぶことにしよう」といったので、後に一般的に「ラージャ・マハーラージ」と呼ばれるようになりました。スワミージーは生前、ラーマクリシュナ・ミッション設立後、そのリーダーシップをラカル・マハーラージ（以降マハーラージ）に引き渡しました。そしてマハーラージは最後の日までラーマクリシュナ僧団の活動を形になさいました。

スワームージーはガンジス川の近くに土地を購入したいと思い、その責務をマハーラージに託しました。それは簡単な仕事ではありませんでしたが、マハーラージはご自身をその仕事に捧げました。

現在のベルル・マトは、購入前に多くの法的煩雑さがあったので、マハーラージはこれらの案件を解決するために、法律家や弁護士に相談しなければなりませんでした。毎朝、軽い朝食を摂ったあと、マハーラージは法律家や他の知者たちに相談するためにコルカタへ行き、帰りが遅くなることも頻繁にありました。ときどき昼食に非常に遅れて食事抜きとなり、空腹のままでもありました。しかし、マハーラージがそのことに不満を言うのを見た者は誰もいませんでした。マハーラージはただ兄弟僧スワームー・ヴィヴェーカーナンダのためだけに、これらの全てを楽しそうに担いました。最終的に土地を得て、法的煩雑さが解決したとき、スワームージーや他の兄弟弟子たちはとても喜びました。

マハーラージが関わらなければならなかったもう一つの非常に困難で骨の折れる仕事は、バリー自治体と訴訟で戦うことでした。自治体は、ベルル・マトを「僧院ではなく」ガーデンハウスとみなして税金を課したのです。最終的にはベルル・マトがその訴訟に勝ち

ましたが、それには一年を要しました。建物の建築、土地の取得、建設に関連する工事の世話、会計管理などは、マハーラージの性質とは真逆のものでしたが、スワームージーと兄弟僧侶のためだけに、マハーラージはこのような仕事の責任を負ったのです。

マハーラージは、スワームージーが提唱した僧団に関する考えに疑問を呈することは一切なく、むしろスワームージーの考えに完全に共感していました。スワームージーもマハーラージをとっても信頼していたので、ある時こう言いました「他の兄弟弟子は全員私のもとを離れるかもしれないが、マハーラージだけは決してそうしないだろう」。ラーマクリシュナ僧団の礎となっているのは、この信頼と忠誠心です。

マハーラージは、神を悟るために家庭生活や家を捨てた見習い僧や僧侶たちに、常に愛情のこもった気遣いを見せました。マハーラージは彼らが定期的に霊的な実践をしているかどうかだけでなく、彼らが栄養価の富む食べ物を食べているかどうかにも気を配っていました。当時は資金が不足していたので、僧侶たちの食料はたいてい十分とは言えませんでした。ベンガルでは、魚が主食でした。タンパク質を取るのに魚はいいです。ある時、信者が大量の魚を持ってきました。魚が調理されると、マハーラージは「見習い僧や僧

侶たちにたくさん出してください」頼みました。しかし、ある菜食主義のスワミーは僧侶が魚を摂るのを好まず、魚が食卓に出されることに批判的でした。その日も同じことが起こりました。このことを知ったマハーラージは非常に厳格になって「ここはヴィシュヌ派の僧院ではないのだから、僧侶が魚を食べることをとやかく言わないでください」と言いました。

マハーラージは小さな行為にも完璧さを重んじました。なぜなら、その人がどのように小さな行為をするかで、その人の人格が判断できるからです。つまり、働くときと瞑想するときの心は、同じ心なのです。私たちが毎日の仕事を場当たりのようにしていれば、私たちの瞑想は深まらず、規則的にもならないでしょう。マハーラージは、見習い僧が内面の生活を築くことを熱望していました。彼は、困難で面倒な仕事に対して間違いを犯した者がいても気にしませんでしたが、誰かが些細でそれほど重要ではない仕事を不注意にするようであれば、非常に気になりました。例えば、花を摘むときに、不注意にも枝の一部も切ってしまったら、マハーラージは見習い僧から職務をとりあげたほどです。ある日、彼は見習い僧と若い僧侶たちにそれぞれ一個ずつジャガイモの皮をむくように言いました。そして「皮をむいたジャガイモを見て、君たちがどれだけよく瞑想しているか

を教えてあげよう」と言いました。皮をむいたジャガイモの中から、ある僧侶(スワミー・シュッダーナンダ)がむいたジャガイモを指して「これはよく瞑想している者がむいたものです」と言いました。

マハーラージはジャパ・瞑想を規則正しく行うことを強調しました。と言うのは、ジャパ・瞑想をしなければ、僧侶としての生活は無味乾燥になるからです。さらに、仕事と共に瞑想をしなければ、怒り、食欲などの低い欲望をコントロールすることはできなくなります。また、規則正しく瞑想をしなければ、仕事はヨーガにはならず、結果として自分のエゴを増やし、霊的求道者を墮落させます。ベルル・マトに滞在中、マハーラージは午前4時までに見習い僧を起こしました。数時間瞑想した後には、礼拝の歌と賛歌の詠唱が続きました。[マハーラージと共に行う]規則正しい霊的实践のおかげで、彼らの心がより高いレベルに引き上げられる雰囲気、すぐに作り出されました。マハーラージは見習い僧や他の僧侶が瞑想に深く飛び込むように力づけたのです。

霊的な組織では、霊性が低下するとメンバー間の意見の違いが大きくなり、亀裂が入ります。このことはメンバーが霊的实践を熱心に行っていない場合に起こる可能性があります。これから

その分かりやすい例を挙げます。「人の中のシヴァ神に仕えよ」、というスワミーの高らかな呼びかけに鼓舞された若い男性たちが、病人を自分たちで看護し始めました。このようにして、ベナレスのホーム・オブ・サービス（奉仕の家）が誕生したのです。彼らは他者に奉仕することを重視し、ジャパ[マントラを繰り返し唱える]、ディヤーナ（瞑想）、スワディヤーヤ（聖典の勉強）は個人の裁量に任されていました。ある時、ベナレスのセヴァアシュラム（奉仕の家）の奉仕者の間で意見の相違がありました。スワミー・サーラダーナンダとスワミー・トゥリーヤナンダは最善を尽くしましたが、その問題を解決することができませんでした。彼らはマハーラージに、ベナレスに来て問題を解決するのを手伝ってくれるように頼みました。驚いたことに、マハーラージはベナレスに来て、意見がぶつかり合っている当事者を話し合いのために呼び出すこともせず、ただ皆に、毎日マハーラージご自身と共に瞑想をするように、とだけ言いました。全員がマハーラージと一緒に瞑想をするようになると、数日で状況は変わりました。彼らは不和の原因を理解し、自分たちでそれを解決しました。彼らの中には、僧侶にはならず在家のまま奉仕をしたい、と思っている者もいましたが、その時にマハーラージから出家をさせられました。

マハーラージが僧団長だった時期に、彼は南インドへの長い旅に出ました。彼はそこで霊性の求道者たちをイニシエートしました。多くの新しいセンターも僧院の支部となり、僧院の活動の拡大とシュリー・ラーマクリシュナのメッセージの普及を助けてました。マハーラージが僧団長として在任中、多くの新しいアシュラムがインドのさまざまな地域でラーマクリシュナ・ミッションに所属しました。マハーラージは、新しく建設するアシュラムの成長と発展のために、広い土地を購入してそこを植物や花で埋め尽くすことを強調しました。彼はインドのある地域から植物を持ってきては別の地域に植えました。これにより、異文化交流への道が開かれました。彼はバンガロールからベルル・マトにナガリングムの種を持ってきました。カンカル・アシュラムは甘いマンゴーで有名ですが、それはマハーラージの努力の結果です。それまでカンカルには良いマンゴーの木がなかったので、インドの他の地域からそれらを持ってきて、ご自身が熱心にそこに植えました。同様に、彼はダッカ（バングラデシュ）からベルル・マトに、ある種類のジャックフルーツを持ってきました。マハーラージは、アシュラムの近くに住む信者たちに、アシュラムの発展を助けるように励ますこともありました。

南インドへの訪問中に、マハーラージ

は「ラームナム」というサンキールタン [旋律をつけて神の御名を唱える] を聞きました。彼は非常に感銘を受けたので、これをベルル・マトで紹介し、僧侶や見習い僧にも歌うように勧めました。ゆっくりとそれはインドの他の支部でも唱えられるように広まり、現在でも、インドのほぼすべての支部でエカーダシーの日 [満月と新月から 11 日目] に歌われています。

このように、スワミー・ヴィヴェーカーナンダが講義で言ったことをスワミー・ブラフマーナンダが、現実化し、具体的な形になるようにしたのです。彼はスワミーが夢見ている僧院のアイデアを強固なものにするよう尽力なさいました。

ある年配の僧侶が彼のところに来て、僧院にいくつかの新しい規則を追加したい、と言ったことがあります。すぐにマハーラージは「新しい規則を追加するよりも、もっと愛を増やしてください。なぜなら、僧団のメンバーを結びつけるのは愛だからです」と言いました。

マハーラージは 22 年間もの長きにわたって僧院長を務めました。彼はこれまでで最長の僧院長です。

マハーラージの兄弟弟子たちは彼の判断を非常に信頼していたので、スワミー・サーラダーナンダはかつて「君

たちは論理と推論をして、ある事柄に関する私たちの決定を判断するかもしれませんが。しかしマハーラージの決定は絶対に判断しないでください。なぜなら、マハーラージはシュリー・ラーマクリシュナと常に交流しているので、彼のすべての決定はシュリー・ラーマクリシュナから直接来たものだからです」と言いました。

マハーラージがシュリー・ラーマクリシュナの教えをまとめた『Words of the Master (師の言葉)』という本を出版した時のことです。シュリー・ラーマクリシュナがある日、彼の前に現れ、「この部分の教えは私が言ったものではないよ」と訂正したこともあります。

悟った魂の心は大きく拡大するので、その人は他者の幸福に幸せを見いだします。実際、小さな「私」が大きな「私」に溶け込むとき、人は他者の福祉のために生きたいと願います。マハーラージの付き人の中に、手に負えない者がいました。ベルル・マトの偉い人たちは、彼をベルル・マトから追い出すことに決めました。その時のセクレタリーはスワミー・サーラダーナンダでした。彼らの決定を聞いたマハーラージはサーラダーナンダジーのところへ行って言いました「君たち全員が〇〇をベルル・マトから追い出すことに決めたと聞いたよ。私は僧団長職をやめて、どこかで彼と住むことに決めまし

た。私が引き受けた者を去らせるくらいなら、私が僧団を去ります」。これを聞いたスワミー・サーラダーナンダはすぐに決定を撤回しました。

マハーラージはまた、墮落した人の救い主でもありました。人は生きるために非道徳な職業を選ぶことを余儀なくされることがあります。しかし、彼らの心はその苦しい状況から抜け出すために叫び、そこから救い出してくれる誰かを探します。舞台女優タラスンダリの身に起こったことは、このことを証明しています：

「私の心に平安はありませんでした。たったひとりで平安を求めてあちらこちらに巡礼に行きましたが、私の心は煮えたぎっていました。ある日、私はビノディーニと共にスワミー・ブラフマーナンダジーに会いに行きました。彼は愛情深い父親のように、たくさんの愛と思いやりを持って私たちを受け入れ、私たち二人に関心を示してくれました。昼時でしたので、彼は私たちのために食事を手配してくださいました。彼は『もっと頻繁にここに来てはどうかね?』と尋ねました。私は、『恥ずかしくて、恐ろしくて、そんなことはできません。私たちは女優なので世間から見下げられていますから』と答えました」(当時、女優は売春婦出身だった) 「マハーラージは私たちの心からすべての恐れとためらいを取り除い

ておっしゃいました『ここはタクールの場所です。タクールがこの世にあらわれたのは、特に落ちた人を救いあげるためです』。数日後、マハーラージは私が出演した劇『ラーマヌージャ』を見に来られました。マハーラージは私を祝福してくださいました。それからマハーラージがブバネシュワルに滞在していたとき、私もたまたまプリを訪れていました。彼がブバネシュワルにおられることを知って、会いに行きました。彼は私に会ったことをお喜びになり、毎日そこで食事をするようにおっしゃいました。私は『彼』の中に、愛情深い父親を見ました。なぜなら、この世では、誰もが通常、私利私欲に支配されているからです。マハーラージは、私の心の状態を判断しながら、『タクールの名を繰り返し唱えるように』と忠告してくださいさり、『私も若い頃には心が落ち着かなかったものだよ。主の御名を繰り返せば、心が穏やかになるのだよ』とご自身の経験を詳しく話してくださいました。私はマハーラージの言葉に安らぎを見出し、私の心の煮えた切った感情は取り払われました。そして私は、彼のおっしゃるとおりにしよう、と決心しました」。

マハーラージは、真の愛と心を込めて彼に仕えたいと願う人々を無視することができませんでした。ある日、バシシュワール・センはビシュヌプルから大きな魚を持ってきました。しかし厨

房係は「これはいりません、どこかへ持って行ってください。別の信者さんが大量の魚をくれたので、それを給仕してしまっただけです」と言いました。当たり前のことですが、センは自分の努力が無駄になったのでしょんぼりしました。それでも、彼はマハーラージのもとへ行きました。マハーラージは彼を見ると「ボシ、君はビシュヌプルから私に何を持ってきてくれたのだね？」と尋ねました。ボシは、「マハーラージ、大きな魚を持ってきましたが、それは要らないと言われました」と言いました。これを聞くとマハーラージは台所に行き、厨房係に「その魚を洗って調理して、私に持ってきておくれ」と言いました。

これらは、マハーラージの生涯の逸話のほんの一部です。これらは彼の内なる人生がどれほど深く、彼の心がどれほど広がったかを示しています。バガヴァッド・ギーターには次の一節があります。

サルヴァ・ブータ・スタム アートマ
ーナム サルヴァ・ブータニ チャ
ートマニ/

イクシャター ヨーガ・ユクタート
マー サルヴァットラ サマ・ダルシ
ャナハ//

本当に真理を覚り、あらゆるものを同等に視るヨーギーは、万物の中に自己（アートマ）を見、自己（アートマ）

の中に万物を見る。6.22

スワミー・ブラフマーナンダの生涯は、この節の証明です。彼は特に、ラーマクリシュナ僧団の僧侶の内面を築くためにご自身を捧げました。なぜなら彼らはシュリー・ラーマクリシュナの解脱のためのメッセージを世界のさまざまな地域に届けなければならないからです。マハーラージは信者の心に信仰心を吹き込み、彼らが霊的生活の中で前進できるようにしました。彼はまさにシュリー・ラーマクリシュナの「マナサ・プトラ」（霊性の息子）だったのです。

2023年2月19日 返子サットサンガ
午後

「スワミー・ブラフマーナンダ」
スワミー・メーダサーナンダ



スワミー・ブラフマーナンダは多くの場合、信者たちに平凡で世俗的なことについて話をし、霊的な説教をする

ことはほとんどありませんでした。その理由は、本当に喉が渴いたときだけ水をおいしく飲めるが、喉が渴いていなければ水を飲むことさえできない、ということが霊的な指導にも言えるからです。真理を真剣に知りたいと思うようにならない限り、霊的な指示を与えられても何の役にも立ちません。霊的な話を聞く人はたくさんいますが、実際に霊的な実践を行うためにそれらをまじめに聞いているわけではありません。ですから、ブラフマーナンダジー（以降マハーラージ）は、真剣な求道者だけに霊的生活について話したかったのです。これがマハーラージの取り組み方でした。つまり、馬の耳に念仏、言っても分からない人には言いませんでした。

それだけではありません、マハーラージは楽しいことも好きでした。彼は冗談をよく言いましたし、兄弟弟子や信者をからかうのが大好きでした。そして趣味は魚釣りトランプでした。これは一般的な僧侶のマナーに反しています。信者たちはときどき、「ラーマクリシュナ僧団の長であるほどのお方が、どうしてそんなことをなさるのだろうか？」と混乱しました。マハーラージがそのようなことをなさった目的は何でしょう？ 本来、霊的な人は、霊的なことを話したり、ジャパや瞑想などをする。これが聖者や偉大な僧侶に対する一般的なイメージです。答えは、

彼の心は常に非常に高い次元に上がっていた、ということです。シュリー・ラーマクリシュナほどではありませんが、これが彼の心の状態でした。コンパスが常に北を指しているのと同じように、彼の通常の意識レベルは神にありました。もし彼が常に神の意識の中にいるとしたら、どうやって他の人に教えることができますか？ そうです、彼は心を神の次元から強制的に降ろすために、ありふれたことを話しました。そうして人々をマーヤーの手中から解放するための教えを与えることができたのです。すなわち、トランプをしたり、魚を捕まえたり、冗談を言ったり、他の人をからかったりすること-これらすべての目的は、心を神の意識からより低い次元に降ろし、他の人に霊的生活についての指示を与え、彼らを平安と悟りの道に導くためでした。実例を挙げましょう：

かつて、ベンガルのミドナポール地区の副治安判事がマハーラージのことを聞いて、霊的生活についての指導を求めたい、そして可能であればイニシエーションを受けたいと思って、ベルル・マトにやって来ました。ベルル・マトの入り口近くには池がありました。この人がマトに入ると、池で魚を捕まえている僧侶を見つけました。彼は少し奇妙に感じました。しかし彼は本堂に行き、僧侶(スワーミー・プレーマナンダ)にマハーラージについて尋ね

ました。プレーマーナンダジーはその時マハーラージが魚を捕まえていることを知っていましたが、これを紳士に明かしたくなかったので、何も言いませんでした。ある予感がしたので紳士は「私はベルル・マトの入口で池で魚を捕まえている一人の僧侶を見ました、彼がスワミー・ブラフマーナンダジーでしょうか？」と尋ねたので、プレーマーナンダジーは、はい、そうです、と答えました。その人はかなりショックを受け、「私は魚を捕るような僧侶からイニシエーションを受けるつもりはありません！」とはっきり言いました。

しばらくしてマハーラージがご自分の部屋に戻ると、プレーマーナンダジーはやや不満げな口調でその出来事を語りました。マハーラージは穏やかに「バブラム(スワミー・プレーマーナンダの僧侶になる前の名前)・ダー、心配しないでください。タクルの恩寵で、そのような将校は大勢この僧団に来るでしょう」。

1週間後、同じ将校が戻ってきてプレーマーナンダジーと面会し「サー、どうかスワミー・ブラフマーナンダジーに会えるように取り計らってください」と頼みました。プレーマーナンダジーは驚いて「前回お見えになった時、あなたは怒って、魚を捕まえるのが大好きなスワミーからはイニシエーションを受け取らないと言ってお帰りに

なりました。それなのに、なぜ、今はブラフマーナンダジーに会いたいのですか？」と尋ねました。その将校は「あの日、ベルル・マトを出てから、私はスワミー・ブラフマーナンダジーの顔を一瞬たりとも忘れることができなくなりました。それで心が落ち着かなくなり仕事も手につきません」と打ち明けました。

そこでプレーマーナンダジーはマハーラージと会えるように手配し、後にその将校はマハーラージからイニシエーションを受けました。そしてその将校はグル・ダクシナ(グルへの捧げもの)としてマハーラージに高価な釣り竿を1本プレゼントしました！ その釣り竿は、ベルル・マトのマハーラージの寺院の二階の寝室に今も保存されています。

もう一つの例：マハーラージは、シュリー・ラーマクリシュナの最も近い在家信者の一人であるバララム・ボシュの家(バララム・マンディール)に滞在していました。マハーラージはそこに滞在するのが大好きでした。彼のための特別な部屋が用意されていて、そこは大金持ちの部屋のように調度品が整えられていました。ある時、ある著名人がマハーラージに会いに来ました。彼はマハーラージがその部屋で昼寝をしているのを見ました。彼は気づかれずに部屋に入ったのですが、シュ

リー・ラーマクリシュナの霊的な息子たるもの、放棄の精神で非常に厳しい環境で生活していると予想していたので、その真逆な姿を見て、かなりがっかりしました。しかし、その男性は自分の内なる思いをさらけ出すことはせず、部屋の外でマハーラージとの会合を待ちました。しばらくすると、彼はマハーラージに会うことを許されました。マハーラージとの話が終わり、帰る時に、彼は言いました「私は人生で最大の過ちを犯すところでした。スワミー・ブラフマーナンダジーとお話をして、私の人生の最大の問題は解決したのです。高価な家具に囲まれているのを見て、最初はマハーラージのことを誤解しました。もしあの時、この場所を去っていたら、私はこの素晴らしい機会を逃したでしょう」。

これらの話は、マハーラージを外から見るだけでは簡単に誤解する、ということを示すために与えられたものです。

さて、マハーラージの霊的偉大さについて話します。ベルル・マトには評議員会がありました。(評議員会はラーマクリシュナ僧団を管理運営する人々です)。彼は僧団長だったので、それらの会議に出席するよう求められていました。彼は出席を求められては拒否したので、会議は何度も延期せざるを得ませんでした。スワミー・サーラダーナンダが書記長で、スッダーナンダジーが書記補佐でした。彼らは何度もマ

ハーラージに会議に出てください、と繰り返しお願いしましたが、何度も断られました。

マハーラージは僧団長だったので、彼の署名が要る重要な書類もありました。そんな時はサーラダーナンダジーかスッダーナンダジーが書類にサインをしてください、とお願いしました。書類にサインをすることはさほど難しい仕事ではありませんね。それなのにブラフマーナンダジーは理由を付けては先延ばしにしようとしてしました。そんなある日、彼らは「マハーラージ、今日こそ署名をしてくださらなければなりませんよ」と言いました。マハーラージはとりあえずペンを取り、署名しようとしてしましたが、「自分の名前のつづりを思い出せない。別の日に書類を持ってきてください」と言いました。

そこで彼らは、会議を何度も延期したり、サインを断る理由を尋ねました。「どうしてなのですか？」と言うと、マハーラージは「ねえ、私には世界は影のように見えるのだよ。それは本当のことにように感じない。だから、あなたたちが私に持ってくるどれにも注意を向けることができないのです。なぜなら、それらに心を置くことができないから」。このことから、彼がどれほど高い心の境地にいたかをよく理解することができます！

『シュリー・ラーマクリシュナの生涯』に、誰かに触れるだけでその人の中の靈的意識を目覚めさせることができる、と書かれています。そして時々、触れなくても、「この人の靈的な意識を目覚めさせてください」と願うだけで、同じ結果が得られることがあります。マハーラージもこれを行うことができました。その例を言います。当時、マハーラージはブバネシュワルに滞在していました。穏やかで静かな青年が僧団を訪れ、図書館で本を読んでいた。ある時、マハーラージが自分の部屋から出てきて、この青年を呼び、向かい合って座るように言いました。青年が座るとマハーラージは青年に触れました。マハーラージが青年に触れた途端に青年は深いサマーディに入りました。それから青年は通常の意識に降りた後、ブバネシュワルの僧団を去り、二度と戻ってきませんでした。誰も彼に何が起こったのか分かりませんでした。この例は、いかにして、ある人の靈的意識が突然目覚めるか、ということを示しています。ですから、時には自己努力や事前の準備なしでも、高度に進化した魂の純粋な恩寵によって潜在的な靈力が引き上げられる、という例があるのです。マハーラージのような人物は、誰の靈的意識が開花する準備ができているかを見て理解することができたので、それに応じて行動なさいました。

マハーラージの直弟子スワミー・ヴィジャヤーナンダが書いた『スワミー・ブラフマーナンダの回顧録』があります。ヴィジャヤーナンダジはアルゼンチンのヴェーダーンタ協会の創設者で、長年アルゼンチンで暮らしました。彼は超能力の現象について説明しました。私たちは皆、超能力についてきたことがあります。それはどのように起こるのでしょうか？ヴィジャヤーナンダジは、小宇宙をコントロールすることができれば、大宇宙もコントロールできるようになる、と言いました。自分の心をコントロールできれば、他者の心もコントロールできます。なぜなら、それはすべての中に存在する同じ存在だからです。それが超能力の説明です。ミクロレベルで人間の中に存在するのと同じプラクリティが、マクロレベルで世界のすべてに存在します。一つの『アトム(※化学的に有意義な最小単位)』を構成するものが、宇宙全体を構成しています、つまり宇宙全体が同じ『アトム』で作られているのです。

私たちは一般的に、自然にコントロールされていますが、心をコントロールすれば、自然はその人に従います。これが超能力の説明です。さて、悟った人が超能力を持てるだけでなく、靈的生活において十分に進歩した人もこれらの力を持つことができます。しかし、本当のところ、神を悟る前に超能力を

使用することは安全ではありません。なぜならそれは自分のエゴを強めるので靈性の発達の障害になるからです。しかし、人が神の悟りに達した後、エゴは「宇宙的私」に解消されるので、これらの超能力は他者の福祉のために使えます。

マハーラージのもう一人の兄弟弟子スワミー・ヴィッギャーナナンダは、僧侶になる前はエンジニアでした。スワミー・ヴィヴェーカーナンダの指導とアイデアの下で、ベルル・マトのシュリー・ラーマクリシュナの大きな本堂を設計したのは彼です。そして、スワミーが肉体を去ってからずっと後、現在のベルル・マトの本堂は、マーティン・アンド・バーン社によって、ヴィッギャーナナンダジーの監督の下で建設されました。彼は科学の人だったので、心の態度は合理的でした。それと同時に、靈的にも偉大なる高みへと上がりました。

ある日、ヴィッギャーナナンダジーとマハーラージの間で超能力についての議論が始まりました。マハーラージは超能力が存在することを繰り返し強調しましたが、ヴィッギャーナナンダジーは強くこう言いました「いいえ、私は信じません。そんなことが本当のわけがありませんから」。

マハーラージ「その証拠が欲しいか

い？」

ヴィッギャーナナンダジー「はい、欲しいですとも」

マハーラージ「オーケー、では賭けをしよう」

それから、二人はかなりのお金を賭けました。快晴でとても暑い日でした。マハーラージは、「今日の午後1時に雨が降る」と言いました。ヴィッギャーナナンダジーは、「こんなに晴れて小さな雲一つないのに雨などふるものですか。そんなことあり得ません」と言いました。

その頃、スワミー・ヴィヴェーカーナンダの寺院が建設中だったので、石灰を運ぶボートがガンジス川に停泊していました。マハーラージは見習い僧に、その船をビニールシートで覆うように言いました。不思議なことに、午後1時の10分前に、どこからともなく巨大な雲が集まり、暗くなってきました。そしてちょうど午後1時に雨が降り始めたのです。ヴィッギャーナナンダジーは自分の部屋から出てきて、雨を見て、また自分の部屋に戻りました。明らかにヴィッギャーナナンダジーは賭けに負けたので、マハーラージは「掛け金をよこしたまえ」、と言いました。ヴィッギャーナナンダジーは「マハーラージ、私がお金を持っていないことはご存じですね。どうかお金を下さい。それであなたにお払いし

ます」と言いました。

この出来事の理解すべき重要な点は、自分の体と心をコントロールできれば、マクロレベルで自然をコントロールできるということです。

別の話をします。一般的に、当時、良い家庭の女性は演劇に参加しませんでした。当初、男性が女性役を演じていましたが、それは不自然だったのでシュリー・ラーマクリシュナのもう一人の著名な在家弟子ギリッシュ・チャンドラ・ゴーシュは、女性に演じさせることを考えました。しかし、良家のお嬢さんは演技をしなかったので、売春婦が女優として採用されました。今日の午前のセッションにも出てきたタラスンダリはそのような女優の一人でした。彼女は本当に非常に才能のある女優でした。当時、彼女は途轍もない精神的苦痛に苦しんでいました。

昼食前のセッションですでに語られたように、ある日、タラスンダリはマハーラージに会いに来ました。お付きの見習い僧は最初、彼女がマハーラージに会う許可を出すことを躊躇しました。しかし、彼女が「どうしても会わせてください」と言い張ったので、見習い僧はマハーラージにそのことを知らせに行きました。マハーラージは見習い僧に「彼女をすぐ前に連れてきたまえ」と言いました。当然、見習い僧は驚き

ましたが、とにかく彼女をマハーラージの居間に呼びました。タラはやって来ると、マハーラージの足元に倒れて涙を流し始めました。そしてマハーラージに言いました「お父さん、どうか私をお救いください！あなたは私のハートで何が起きているかご存じのはずです。私には平安がありません」。するとマハーラージは、「我が娘よ、あなたは私を『父』と呼んだのだから、自分のことをスワミー・ブラフマーナンダの娘と呼べばいいのだよ」と言いました。分かりますか、マハーラージはタラの気持ちをどのようにまったく別の方向に変えたか。マハーラージはまた、彼女に安らぎを与え、心を楽にすることをたくさん話しました。そして見習い僧に彼らのために食べ物を持って来るように言いました。

しばらくして、タラはブバネシュワルに行き、そこに家を建てて霊的实践をしました。その後、マハーラージが亡くなったとき、彼女がやって来ました。マハーラージとの最初の会合で出会った見習い僧は、その頃には僧侶(スワミー・ヴィジャヤナンダ)となっていました。タラは彼に「私の愛する兄弟、私たちのお父様はもう肉体がありませんが、彼はいつだって私たちの心におられます」と言いました。その頃までに、彼女の人生は完全な変化を遂げていました。ラージャ・マハーラージの一言「スワミー・ブラフマーナンダ

の娘と名乗れるように生きなさい」だけで、彼女の人生観は変わり、信者になったのです。マハーラージのような聖者には、それを行う力がありました。

これらすべてのエピソードは、スワミー・ブラフマーナンダの偉大な霊性の高さと、人の霊性を変容させる彼の途方もない力を示しています。だから彼は「シュリー・ラーマクリシュナの霊性の息子」と呼ばれるのにふさわしいのです。

シュリー・ラーマクリシュナ生誕祭からの写真





忘れられない物語

「グル・ナーナクとムッラー」

インドには400年前に生誕した偉大な預言者、グル・ナーナクがいた。シーク教徒、戦う人々について聞いたことがある人もいるだろう。彼はシーク教の教祖だった。

ある日、彼はイスラム教のモスクに行った。キリスト教国ではキリスト教に反することには誰もが口をつぐむように、このイスラム教徒たちは、自国で恐れられている。彼らは、自分たちに同意しないすべての人を殺し、批判する自由があると考えている。さて、グル・ナーナクが入ると、中には大きなモスクがあり、祈っているイスラム教徒たちがいた。彼らは列を作って、ひざまずいたり、立ち上がったたりしながら、ある言葉を繰り返していた。一人の男性が先導していた。

グル・ナーナクはそこに行き、そのムッラー(先生)が「最も慈悲深く親切な神、すべての師の師、の御名において」と言ったとき、笑みを浮かべて言った「あの偽善者を見たまえ」。ムッラーは激怒した。「おまえはなぜ笑っているのだ？」

「あなたが祈っていないからです。友よ。だから笑っているのです」

「祈っていないだと？」

「そうですとも。あなたの中に祈りは

無い」

非常に怒ったムッラーは治安判事に苦情を申し立て言った。「この異教徒の悪党はわざわざ私たちのモスクにやってきて、私たちが祈っているときにニヤニヤするのです。罰として即刻死刑にしてください。彼を殺してください」グル・ナーナクは治安判事の前に連れて行かれ、なぜ笑みを浮かべたのかと尋ねられた。

「ムッラーが祈っていなかったからです」

「では、彼は何をしていたのかね？」と治安判事は尋ねた。

「治安判事、彼をここに連れてください。そうすれば彼がしていたことをお話しします」

治安判事はムッラーを連れてくるように命じた。彼がやって来ると、治安判事は「さあ、ムッラーが来た。彼が祈っていたときに笑った理由を説明なさい」と言った。

グル・ナーナクは「誓いのためにムッラーにコーランをお渡しください。彼は『アッラー、アッラー』と言いながら、家に残してきたチキンのことを考えていたのですよ」と言った。

哀れなムッラーは狼狽した。彼は他の人々よりもわずかばかり誠実だったので、「確かにチキンのことを考えていました」と告白した。そこで、イスラム教徒たちはシーク教徒(グル・ナーナ

ク) を釈放した。

「しかし」と治安判事は言った、「もうモスクに行かないように。モスクで冒涇と偽善を犯すくらいなら、まったく行かない方がいいのですから。祈る気持ちが沸かないときに行ってはなりません、偽善者にならぬように。チキンのことを考えずに、最も慈悲深い至福の神の御名を唱えなさい」。

今月の思想

だから、一生懸命働き、全ての義務をやり遂げ、自らを鍛えあげ、それから行って、最高なる存在に明け渡しなさい。一日中、実直に働き、その後に座って瞑想し、それから自身を神に委ねなさい。そうでない瞑想には意味も価値もない。怠惰な一日の終わりの瞑想には意味がないが、良いことをたくさんした活動的な日の終わりの瞑想には意味があり、実りがある。

…スワミー・ランガナターナンダ

発行：日本ヴェーダーンタ協会

249-0001 神奈川県逗子市久木 4-18-1

Tel: 046-873-0428

Fax: 046-873-0592

Website: <http://www.vedanta.jp>

Email: info@vedanta.jp